



校長室だより

黒部市立荻生小学校
文責：校長 寺島紀子
令和5年1月23日
第38号

今季最大の寒波到来の予報 安全メール、TV等の情報に注意してください

「大寒」の時季に合わせるかのように、明日24日（火）から今季最大の寒波がやって来るという予報が繰り返し出されており、2年前のような大雪にならないか心配なところです。もし市内の小中学校が臨時休業となる場合は黒部市教育委員会が決定し、文書が出されます。学校では市教委から連絡があった場合はできるかぎり速やかに各ご家庭に連絡がいくように努めます。保護者の皆様は、最新の気象情報と合わせ、学校からのおたより、安全メール、そしてTVのニュース等に注意してください。また、臨時休業とはならない場合も、お子さんの登下校の安全と防寒対策に、各々最善の対応をお願いいたします。

ピンチはチャンス 「補欠授業」をプラス思考で考えると・・・

本校では、単独で授業ができる常勤の教員が教頭も含めて10名（ほか1名が他校と兼務で週2日のみ本校勤務）で、全校8学級の授業に対応しています。1つの授業を2人で担当したり、別室の児童に個別の対応を行ったりもしています。空き時間（提出物の点検や成績処理、授業の準備、文書作成等、授業以外の業務を行います）の教員は毎時間多くても1～2名、時間によっては事務職員しか職員室にいないこともあります。そのような中で、出張や休暇により、やむを得ず元々の担当ではない教員が授業を担当する場合があります。いわゆる「補欠授業」です。

先週もいくつかの学級で補欠授業を行った時間がありました。教務主任の霜野先生が限られたメンバーをめいっぱいやりくりして采配し、なんとか全学級の授業を行うことができました。限られた空き時間に補欠を頼まれても「お互い様」の心で快く引き受けてくれた先生方に感謝！です。

さて今回、思いきりプラス思考になって、補欠授業だからこそのよさを考えてみました。まず子供の側からいくつか考えてみます。

○担任以外の先生の人柄に触れ、指導に触れることができる。

日頃の授業では触れ合うことがほとんどなかった先生が自分に語りかけ関わってくれます。子供にとっては、担任とは違う先生の人柄に触れ、指導に触れるよい機会となります。小学校では、子供にとって学級担任の存在がどうしても大きなウエイトを占めますが、こうした補欠授業を通して思いがけない先生と出会い、関わり合うことができます。

○「SOSを出せる相手（心の居場所）」の数が増える。

学校内にいろいろな先生（大人）がいることが分かれば、その分、子供の心の居場所が増えていきます。子供にとって、いざというときSOSを出せる相手がたくさんいるということです。心に悩みを抱えている子供にとって、これは心強いことなのではないかと思えます。

一方、教員側から考えてみると、

○校内の他の学級の様子を知り、いろいろな子供と触れ合うことができる。

○子供について、学級の垣根を越えた情報交換ができ、子供への理解が深まる。

○学級内の問題や子供への支援・指導について担任だけで抱え込まない心のゆとりができる。

といったことがよい点ではないかと思えます。つまり、補欠授業のあるなしに関係なく、日頃から教室を学級担任と子供たちだけの閉じた空間ではなく、風通しと「人通し(?)」のよいオープンな空間にしておくことが、子供にとっても、教員にとっても大切なことなのだろうと思えます。

そして「みんな違ってみんないい」 学校内にはできるかぎりいろいろなタイプの大人がいること（バリエーションのある教職員集団であること）がよいのだろうとも思えます。

小学校では中学校のような「教科担任制」は簡単にはできないでしょうが、子供がいろいろな大人と関わって学んでいけるような仕組みや方法について、もう少し考えてみたいと思っています。

★この「校長室だより」のカラー版は本校のホームページをご覧ください。★ご意見、ご感想をお待ちしています。下に記入しご提出ください。



地域の方も一緒に・・・ 4年生「黒部踊り」練習会

20日(金)の3限に、4年生は「黒部踊り」の練習会に参加しました。これは黒部市教育委員会が進めている事業を活用したもので、当日は講師の高山順子先生のほか市教委生涯学習文化課の担当者も2名来校されました。子供たちは興味津々な様子で練習し、熱心に質問したり感想を述べたりしていました。また、この練習会には自治振興会の松島会長さんはじめ地域の4名の方々も参加されました。

地域の方と一緒に活動するよい機会になりました。皆様お疲れ様でした。



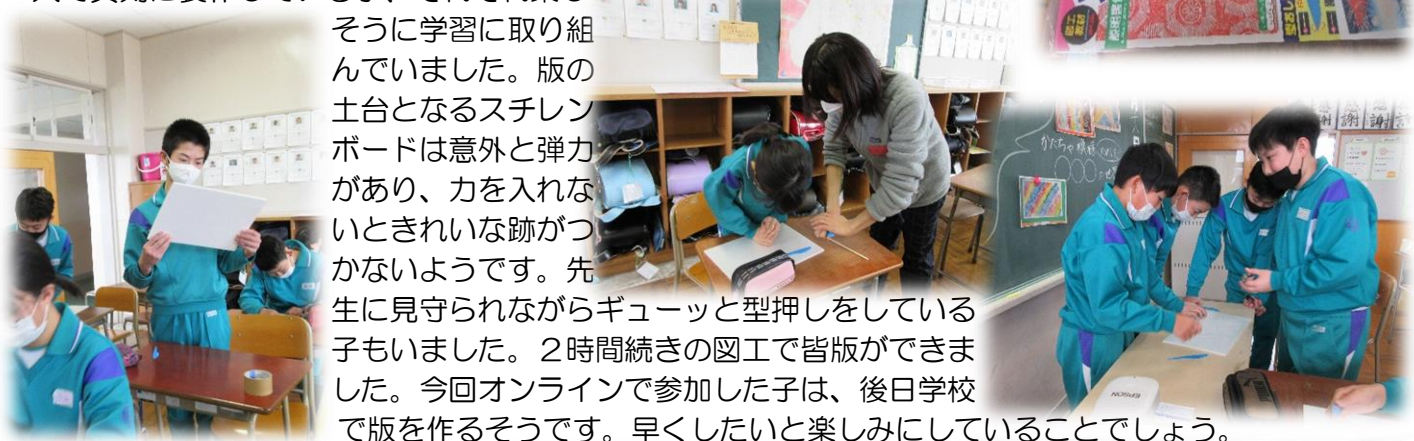
シリーズ「教室におじゃまします」 1/18(水)6年図画工作科の巻

数名の子が自宅待機となり、オンラインで学校と家庭をつないでの授業でしたが鈴木先生も子供たちも、もはや自然にタブレット(カメラ)を操作していました。

冬の季節の図工の定番は版画ですが、今回6年生はスチレン版画に挑戦します。彫刻刀は使わない代わりに、身近な道具や専用のへらを使って型押しをしています。似たようなことを低学年の頃に黒部市美術館の出前授業でやったことがあることを思い出した子がいました。また、見本となる過去の作品を見ながら「〇〇の世界」と題名を考えてみるなどして、子供たちは徐々に学習内容への興味をもったようでした(いつもながら鈴木先生の説明や語りかけは優しく丁寧で分かりやすく感心します)。いよいよ版画セットが配られ、活動開始です。

教室の前の机で、試しに型押しを試みる子、近くの友達と相談している子、1人で真剣に製作している子、それぞれ楽し

そうに学習に取り組んでいました。版の土台となるスチレンボードは意外と弾力があり、力を入れないときれいな跡がつかないようです。先生に見守られながらグューッと型押しをしている子もいました。2時間続きの図工で皆版ができました。今回オンラインで参加した子は、後日学校で版を作るそうです。早くしたいと楽しみにしていることでしょう。



おまけの<ひとこと> 私は小学校勤務4年間のあとに中学校に17年間勤務したのですが、小から中へ変わった当時は、中学校の職員室で学級、学年の枠を越え、皆で生徒のことをあれこれと心配したり指導、支援したりしている雰囲気には驚きました。教科担任制で1つの学級にたくさんの教員が関わったり、部活動の指導があったり、自然とお互いオープンに語り合える職員室でした。また、小学校以上にいろいろなタイプの教員がいるおもしろさがありました。小学校には小学校の、中学校には中学校のよさがあるのですが、それぞれの勤務経験を生かし、子供にとってよいこと、教師にとってよいことを考えてみたいと思います。

★この「校長室だより」のカラー版は本校のホームページをご覧ください。★ご意見、ご感想をお待ちしています。下に記入しご提出ください。